

プラトン『パイドン』62Aの“ἔστιν ὅτε καὶ οἷς”

納富信留

ソクラテス最期の一日の対話を描くプラトン『パイドン』では、「自殺」が神の掟によって禁止されていることが語られる。ソクラテスは死刑判決に従いその日のうちに自ら毒杯を仰ぐという「自死」を強えられるはずであり、「自殺禁止」論は、ソクラテスの「死」への態度を考える上で重要である。他方、その一節(62a2-7)の読み方をめぐっては解釈が紛糾している。古代以来の伝統的な読みは19世紀以降強い批判に晒され、文法的・内容的な問題点が数多く指摘されてきた。だが、日本語訳ではこれまで一貫して伝統的解釈が採用され^{*1}、「耐え難くぎこちない」^{*2}と呼ばれた言語上の難点は無視されてきた。本小論では、その言語の問題に焦点を当てて、該当箇所を読みを再考する。

問題となる62a2-7には重要な写本上の異読はない。構文と意味の取り方について多様な解釈が提出され紛糾しているが、争点と選択肢はLoriauxとGallopが整理しており、ここではくり返さない^{*3}。

62a2 ἴσως μέντοι θαυμαστόν σοι φανείται εἰ τοῦτο μόνον
τῶν ἄλλων ἀπάντων ἀπλοῦν ἔστιν, καὶ οὐδέποτε τυγχάνει τῷ
ἀνθρώπῳ, ὥσπερ καὶ τὰλλα_[A] ἔστιν ὅτε καὶ οἷς_[B] βέλτιον
a5 τεθνάναι ἢ ζῆν, οἷς δὲ βέλτιον τεθνάναι, θαυμαστόν ἴσως
σοι φαίνεται εἰ τούτοις τοῖς ἀνθρώποις μὴ ὅσιον αὐτοὺς
ἑαυτοὺς εὖ ποιεῖν, ἀλλὰ ἄλλον δεῖ περιμένειν εὐεργετην.

私が問題とするのは、[A]の箇所にコンマを入れるBurnet(1900, 1905²)のOCT版やStrachan(1995)のOCT新版等の通常の句読法である。この句読法は、それに続くἔστιν ὅτε καὶ οἷςの構文処理を、ギリシア語としてきわめて不自然、あるいは、不可能にするか

^{*1} 菊池(1924)、岡田(1942)(1946)(1969)、村治(1947)(1968)(1973)、藤沢(1959)(1964)(1972)、池田(1963)(1966)(1968)、松永(1975)、岩田(1998)、朴(2007)、水崎(2011)を参照。朴(1993)はこの伝統的読みを擁護している。

^{*2} Verdenius(1958), 198, “an inexplicable clumsiness of the Greek”; Gallop(1975), 80, “an intolerably clumsy way of expressing the idea”.

^{*3} Cf. Loriaux(1969), 50-59, Gallop(1975), 79-83.

らである。

[A] で区切る読み方は *ὡςπερ καὶ τὰλλα* を挿入節として独立させるが^{*4}、それ以降の処理を難しくすることがこれまでも問題とされてきた。挿入節を挟んで、*a3-4 οὐδέποτε τυγχάνει τῶ ἀνθρώπῳ* と *a4-5 ἔστιν ὅτε καὶ οἷς βέλτιον τεθνάναι ἢ ζῆν* をどう接続させるかで、解釈が紛糾している。

オリュンピオドロスやシンプリキオスに遡る伝統的解釈は、「死が絶対的に生より善い」という主張をこの箇所を読む。その解釈を擁護する Bluck は、“it never happens (as with everything else) that death is preferable to life for man only on some occasions and in some cases” (イタリック原文) と訳出している^{*5}。彼は主動詞を *τυγχάνει* + 分詞 (省略) の構文と理解しているが、*ἔστιν ὅτε καὶ οἷς* の部分に “only” (μόνον) といった過重な負荷をかけて解釈していることが批判的となってきた^{*6}。というのは、*οὐδέποτε τυγχάνει τῶ ἀνθρώπῳ / βέλτιον (ὄν) τεθνάναι ἢ ζῆν* は、文字通りには、「人間にとって、生より死がより善いということは決してない」という意味になり、伝統的解釈の意図とは逆の意味になってしまうからである。他方、同じ構文理解の上でその文を文字通りにとる Burnet は、*ἔστιν ὅτε καὶ οἷς* を“(that is at certain times and for certain men)” と丸括弧付きの挿入節で訳出している^{*7}。

これまで、[A] の区切りで *a2-5* が解読可能と思われてきたのは、*ἔστιν ὅτε καὶ οἷς* が *ἐνίοτε καὶ ἐνίοις* (ある時、ある人々に) という副詞句に単純に置換して理解されたためである^{*8}。確認しておく、この表現は、動詞 *ἔστιν* に時の関係副詞 *ὅτε* / 人の関係代名詞 *οἷς* が組み合わされた文である。文法的な説明によれば、不特定の指示詞 + 関係代名詞を伴う *ἔστιν* の存在文から先行詞が省略されて成立した文 (動詞は単数形) が慣用的に用いられるようになり、また、関係副詞にも適用されて副詞代替的表現となった^{*9}。*ἔστιν ὅτε* の表現には LSJ で “sometimes, now and then” という訳も含まれるが、正確には「～の時がある」(there are times when) という完全文である。Burnet 解釈に従う Rowe が “*ἔστιν ὅτε* and [*ἔστιν*] *οἷς* are independent expressions, not affecting the syntax” と注記しているのは、その理解であろう^{*10}。だが、構文から単純に独立させる挿入的な用法がここで適切か、慎重に考察されるべきであろう。

^{*4} この区切りは、Heindorf, Bekker, Stallbaum, Ast, Baiter et al., Hermann, Robin ら、ほとんどの校訂者が採用している。他方、1578 年刊 Stephanus 版は *a4 ἔστιν* の後にコンマを打っている。

^{*5} Bluck (1955), 43.

^{*6} Cf. Geddes (1863), 192, Verdenius (1958), 198.

^{*7} Burnet (1911), 22–23.

^{*8} Cf. Geddes (1863), 192, Burnet (1911), 23.

^{*9} Cf. Kühner–Blass–Gerth (1976), §554.4–5, esp. Anmerk. 9, Cooper (1998), §61.5.1–5.5.

^{*10} Rowe (1993), 127.

LSJは当該箇所に加えて、ヘロドトス『歴史』2.120とソフォクレス『アイアス』56を用例に挙げている。

Soph. *Aj.* 56–58: *κἀδόκει μὲν ἔσθ' ὅτε / δισοῦς Ἀτρείδας αὐτόχειρ κτείνειν ἔχων, / ὅτ' ἄλλοτ' ἄλλον ἐμπίτνων στρατηλατῶν.*

この例では、一見 *ἔσθ' ὅτε* が挿入句になっているように見える。だが、「ある時に」がどこを限定するかを厳密に考えると、*ἔσθ' ὅτε* が従属節内に副詞句として挿入されているというより、*ἐδόκει* が *ἔσθ' ὅτε* の主文から hyperbaton となっていることが判る。アイアスは「ある時にアトレウスの息子たちを手にかけた」（従属節内の挿入）のではなく、「ある時にそう思った＝そう思った時がある」（主文）からである^{*11}。ヘロドトスの用例も含めて、*ἐστὶν ὅτε* はしばしば hyperbaton を伴うが^{*12}、その場合、厳密には挿入句ではなく主文を成すものと見なされる。

プラトン著作でこの表現は、『パイドン』74c1も含めて30箇所ほどで用いられる（うち1箇所は偽作）^{*13}。*ἐνίοτε* や *τότε* と並列される文脈もあるが^{*14}、主文への挿入として現れるのは2箇所のみである。

Resp. 439c2: *Πότερον δὴ φῶμέν τινας ἐστὶν ὅτε διψῶντας οὐκ ἐθέλειν πινεῖν;*
[*Eryxias*] 404a8: *Οὐκοῦν φαίνοιτο ἂν ἡμῖν ἐστὶν ὅτε ἄνθρωπος οὐδενὸς τούτων δεόμενος πρὸς τὴν τοῦ σώματος χρείαν;*

これらの箇所では、確かに *ἐστὶν ὅτε* が従属節内に挿入されている。だが、動詞 *φημί / φαίνομαι* の目的語には不定詞・分詞が要求されることから、そこにこの表現が組み込まれたことで構文が融合しているとも分析される^{*15}。プラトンの用例を見るかぎり、*ἐστὶν ὅτε* が常に単純に *ἐνίοτε* と置換される独立句と見なすことには慎重であるべきである。

もし *ἐστὶν ὅτε καὶ οἷς* が挿入句でなければ、[A]での区切り後は asyndeton を成すが、それを回避しようとして接続詞 *ἀλλὰ* や *δὲ* を補うと構文と文意が完全に変わる。実際、Tarán は [A] で文章を一旦完全に切って、*ἐστὶν ὅτε καὶ οἷς* から新しい文が始まると提案し

^{*11} Jebb: now he deemed that ...; Lloyd-Jones (Loeb): and at one time he thought ..., at another that.

^{*12} E.g. Pl. *Lg.* 908d, Xen. *Cyr.* 3.1.20, 3.1.24.

^{*13} *Lys.* 217e5, *Gorg.* 512b6, *Euthd.* 278a5, 296a6 (bis), *Phd.* 74c1, *Crat.* 424e1, *Resp.* 415b1, 439c2, 561d1, 575b7, *Phdr.* 237e1, *Th.* 150b1, 184c3, *Plt.* 303e2, *Phlb.* (32d6: 別の読み?), 36a8, 49d6, *Tim.* 60d2, *Lg.* 708b5, 864c6, 867d5, 893d8, 908d5, 913d3, 925d6, 926a9, b2, 957d4, [*Eryx.*] 404a8.

^{*14} *ἐνίοτε*, *Lys.* 217e5, *Crat.* 424e1, *Th.* 150b1; *τότε*, *Resp.* 561d1.

^{*15} 最初の例は、やや不自然ではあるが *ὅτι* でこうパラフレイズされる: *Πότερον δὴ φῶμέν ὅτι ἐστὶν ὅτε τινὲς διψῶντες οὐκ ἐθέλουσι πινεῖν;*

ている^{*16}。[A]の箇所に欠落を想定する Müller らの解釈や、ἀλλὰを補う提案も同様の意図である^{*17}。[A]の区切り以後は、「(しかし、)生よりも死がより善い時や人々がある」といった意味になるが、その場合、βέλτιον τεθνάναι ἢ ζῆν は τυγχάνειに支配されず、ἔστιν ὅτε καὶ οἷςの内容として ἔστινを補って理解される^{*18}。だが、この構文理解では[A]以降が asyndeton になる難点に加えて、οὐδέποτε τυγχάνει τῷ ἀνθρώπῳが十全な意味をもたない危惧がある^{*19}。

こういった諸難点は、[A]で区切らずに[B]までを挿入節とすることで回避される。この句読法は Wohlrab, Vicaire が採用しており^{*20}、「他の事柄が、ある時、ある人々にとってそうであるように」と訳される。この句読法では、前後の οὐδέποτε τυγχάνει … βέλτιον (ὄν) τεθνάναι ἢ ζῆν が素直に連結するため、構文上の不整合はなくなる。また、καὶ τὰλλα ἔστιν ὅτε は οὐδέποτε の全否定と対照をなすため、主文と逆の場合を示す挿入節となる。また、ἔστιν οἷς も主文の τῷ ἀνθρώπῳ (類としての「人間」と明瞭な対照を示すことになり、[B]で区切る利点となる。この場合、ἔστιν ὅτε καὶ οἷς は挿入句ではなく、ὥσπερ 節内の文をなす。

翻って考えると、これまで ἔστιν ὅτε καὶ οἷς の構文上の処理ができないまま、無理な、あるいは文法的に不可能な解釈がなされてきたのは、オリュンピオドロスやシンプリキオスに遡る伝統的理解の影響ではなかったか。彼らはプラトン哲学の根本が「死は絶対的に生より善い」との立場にあると前提し、その考えがここでも表明されていると取っていた^{*21}。「肉体は魂の牢獄」や「死の訓練」といったオルフェウス=ピュタゴラス教色の強い死生観が読み込まれ、それゆえギリシア語で素直に「生より死がより善いことは決してない」と読まれるべき文章が、真逆に解釈されたのであろう。ἔστιν ὅτε καὶ οἷς を組み込む

^{*16} Cf. Tarán (1966). その場合にも asyndeton の難点は残るが、この句読法を Gallop (1975), 82 は評価して、自身の提案 (v) につなげている。

^{*17} Müller (1959), 341: τὰλλα (διάφορόν τι ἔχων. οὐ γάρ που ζῆν ἀεὶ καὶ πᾶσι καλόν, ἀλλ') ἔστιν ὅτε. [διάφορόν は διάφορόν の誤りであろう] Cf. Tarán (1966), 335, n. 31.

^{*18} 従って、Burnet による α4 ὄν の分詞挿入は、彼自身が提案する構文には必要という訳ではないが (cf. Verdenius (1958), 198)、このような別の構文を排除する意味をもつ。

^{*19} この点は、Bonitz (1886), 319、及び、Tarán (1966), 335, n. 31 の批判を参照。

^{*20} Wohlrab (1907), 39: “Wie alles andre, was in der Regel ein Übel ist, doch unter Umständen (ἔστιν ὅτε) und für manche Personen (ἔστιν οἷς) ein Gut ist”; cf. Bonitz (1886), 319–320. Vicaire (1983), 9: “comme dans les autres cas, où l'on tient compte des circonstances et des personnes” (Budé 版テキストも Robin (1934) から変えられている)。

^{*21} Olymp. in *Phd.* I §19 (Westerink): θαυμαστόν σοι φαίνεται ὅτι τῶν ἄλλων πάντων ἐπαμφοτερίζοντων καὶ ἀγαθῶν καὶ κακῶν δυναμένων εἶναι, οἷον πλούτου, ξίφους, ὁ θάνατος μόνως ἀγαθός ἐστιν. Simpl. in *Epicteci Enchiridion*, 28.33–37 (Dübner): ὁ δέ γε Πλάτων, καὶ ὁ τοῦ Πλάτωνος Σωκράτης, καὶ ἀγαθὸν αὐτὸν (sc. τὸν θάνατον) εἶναι, καὶ κρείττονα τῆς μετὰ τοῦ σώματος ζωῆς, ἀποφαίνεται· οὐ τοῖς μὲν, τοῖς δὲ οὐ' ἀλλ' ἀπλῶς πᾶσι. λέγει οὖν ὁ ἐν τῷ Φαίδωνι Σωκράτης, κτλ.

無理な構文理解が、その改訳の基盤となった。そして、古代末期からつづくその伝統を、日本の訳者たちはそのまま受け入れてきたのである。

ἔστιν ὅτε καὶ οἷς の構文上の処理だけで 62a2-7 全体は理解できないが、(写本上の問題がないという前提で) まずはギリシア語として正しい構文理解に立ち、その上で解釈の選択肢を重ねるべきであろう。以下に試訳を示す。

「しかしながら、おそらく君には驚くべきことに思われるだろう。他のすべてのことの中で、このこと〔自殺をしてはならないこと〕^{*22} だけが端的に成り立っており、つまり正に、他の事柄が、ある時、ある人々にとってそうであるのとは異なり、人間にとって生きるよりも死んでいることが善いということが決してないとしたら。あるいは、死んでいることがより善い人たちがいた場合でも、その人々にとって自身に善きこと〔自殺〕を行うのが敬虔ではなく、他の手助けをしてくれる人を待っていなければならないとしたら、君にはおそらく、驚くべきことに思われるだろう。」

「自殺」が神によって絶対的に禁止されているということは、言い換えれば「生が死より善い」がすべての人間に適用されること、更に、一般に死んだ方が善いと考えられる人々の場合でも、自殺は不敬虔であることを意味する。この考えは、ヘラクレスやアイアスやアンティゴネらの自殺を英雄伝説とするギリシア人にとって、驚くに値する。その禁止の理由を説明した後、ソクラテスは神があえてそれを命じられる場合には例外となることを述べ、自身の状況がそれに当てはまることを示唆している (62c6-8)。62a2-7 の一節は、ケベスに代表される一般の聞き手が「自殺禁止」に対して抱く反応を要約することで、そのパロディシカルな性格を際立たせる、ややレトリカルな文章であるように思われる^{*23}。

(慶應義塾大学)

^{*22} 「このこと」が何を指すかについて、(1) 死が生より善いこと (オリュンピオドロス、シンプリキオス、Bluck、日本語の訳者たち)、(2) 生が死より善いこと (Burnet, Hackforth, Rowe)、(3) 自殺をしてはならないこと (Archer-Hind, Loriaux, Gallop) で解釈が分かれている。私は (3) の解釈がこの前後の文脈に相応しいと考える。

^{*23} 草稿の段階で、大芝芳弘、佐野好則両氏から貴重なご意見と資料をいただいた。お礼申し上げたい。

参考文献

- Archer-Hind, R. D., *The Phaedo of Plato*, edited, with introduction, notes, and appendices, 2nd edition, London, 1894.
- Bluck, R. S., *Plato's Phaedo*, translated, with introduction, notes, and appendices, London, 1955.
- Bonitz, H., 'Zur Erklärung von Platons Phaidon p. 62A', *Platonische Studien*, 3 Aufl., Berlin, 1886, 313-323.
- Burnet, J., *Platonis Opera* I, Oxford Classical Texts, Oxford, 1900, 1905².
- Burnet, J., *Plato's Phaedo*, edited with introduction and notes, Oxford, 1911.
- Cooper, G. L., *Attic Greek Prose Syntax*, vol. 2, Ann Arbor, 1998.
- 藤沢令夫訳、プラトン『パイドン』(世界文学大系 3 『プラトン』)、1959；(世界古典文学全集 14 『プラトン I』)、1964；(筑摩世界文学大系 3 『プラトン』)、筑摩書房、1972.
- Gallop, D., *Plato's Phaedo*, translated with notes, Oxford, 1975.
- Geddes, W. D., *The Phaedo of Plato*, edited with introduction and notes, Edinburgh, 1863.
- Hackforth, R., *Plato's Phaedo*, translated with an introduction and commentary, Cambridge, 1955.
- 池田美恵訳、プラトン『パイドン』(『プラトン名著集』)、新潮社、1963；(世界の名著『プラトン I』)、中央公論社、1966；プラトーン『パイドーン』、新潮文庫、1968.
- 岩田靖夫訳、プラトン『パイドン』、岩波文庫、1998.
- 菊池慧一郎訳、プラトン『パイドン』、岩波書店、1924.
- Kühner, R., Blass, F. und Gerth, B., *Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache* II-2, 4 Aufl., Hannover, 1976.
- Loriaux, R., *Le Phédon de Platon* I, commentaire et traduction, Namur, 1969.
- 松永雄二訳、プラトン『パイドン』(岩波『プラトン全集』1)、岩波書店、1975.
- 水崎博明訳、プラトーン『パイドン』(『プラトーン著作集』1-2)、権歌書房、2011.
- Müller, G., 'Platons Paidon ed. Dirlmeier; *Plato's Phaedo*, ed. Hackforth', *Gnomon* 31 (1959), 340-346.
- 村治能就訳、プラトン『パイドン——魂不滅論——』、綜合出版社、1947；『パイドン——魂について——』、角川文庫、1968；(角川『プラトン全集』1)、角川書店、1973.
- 岡田正三訳、プラトン『パイドン』(『プラトン全集』1)、第一書房、1942；(『プラトン全集』1)、全国書房、1946；(『プラトーン全集』1)、全国書房、1969.
- 朴一功「プラトンの「自殺禁止論」」、『京都大学古代哲学研究会紀要』3 (1993)、1-13.

- 朴一功訳、プラトン『パイドン』（西洋古典叢書）、京都大学学術出版会、2007.
- Robin, L., *Platon, Phédon*, texte établi et traduit, Budé, Paris, 1934.
- Rowe, C. J., *Plato, Phaedo*, Cambridge, 1993.
- Strachan, J. C. G. ed., *Plato, Phaedo, Platonis Opera I*, Oxford Classical Texts, Oxford, 1995.
- Tarán, L., ‘Plato, *Phaedo*, 62A’, *American Journal of Philology* 87 (1966), 326–336.
- Verdenius, W. J., ‘Notes on Plato’s *Phaedo*’, *Mnemosyne* 11 (1958), 193–243.
- Vicaire, P., *Platon, Phédon*, texte établi et traduit, Budé, Paris, 1983.
- Wohlrab, M., *Plato, Phaidon*, 4 Aufl., Leipzig und Berlin, 1907.